

新文学国語 目次

「巻頭詩」最初の質問
この教科書が目指す国語の力

詩・長田弘 絵・いせりこ

14

I部

1

発想と感覚

文学の言葉を感じ取る

言葉の響きを味わう
発想の展開を捉える

二十億光年の孤独

意味以前の世界 探究

谷川俊太郎

20

虹の雌雄

RAIN 探究

谷川俊太郎
蜂飼耳

23

詩や歌詞の言葉の選び方に触れ、「文学」の世界への導入を図ります。

SEKAI NO OWARI

24

「にじ」をめぐる言語文化誌

29

2

読みの深まり

解釈の多様性を楽しむ

さまざまな読み方を考える
読みの広がりを追う

予感

作家の読書道(青山七恵) 探究

聞き手・瀧井朝世

32

雉始雌

近・現代の短歌と俳句 探究

石川不二子・正岡子規ほか

37

浦島太郎、空に舞う

57

第1～第5単元では、文学を読むための基礎的能力を習得します。

表現プラザ1
みんなであつなぐ
リレー小説

読み手に興味をもたせる構成や展開を工夫する

冒頭書き出し例集

「表現の扉をひらく」自分のなかに「語り手」をつくる
トルストイ・芦沢央ほか

66

3

人間の姿と心

心情の表現に読みひたる

(「執着」)する心をつまえる
思う心を捉える

山月記

石ならぬ中島敦 探究

中島敦

68

デューク

草之丞の話(部分) 探究

三浦しをん

82

虫に小鳥に蚕に虎に……変身の話

92

4

作品の挑戦

作家のストラテジーを読み解く

作品の主題を深める
作中の「謎」を考える

少年という名前のメカ

皮膚と心 探究

松田青子

98

バースデイ・ガール

村上作品の比喩表現例・「バースデイ・ガール」について 探究

藤崎彩織

106

表現者の言葉、享受者の感性

112

未知へ 木村信子 / 夕焼け 吉野弘 / 売炭翁 白居易

「表現の扉をひらく」タイトルは、書く「わたし」を上げます

133

表現プラザ2
想像からの語り

心情の語り方を工夫する

140

第6～第9 単元では、**習得した能力**を活用し、**文学の魅力**を学びます。

5

意味と解釈

表現の意味を捉え直す

叙述から心情を想像する

叙述の意味を解釈する

こころ

夏目漱石、読んじやええば？

物語もつと深読み教室

夢は何語で見る？

明治時代のスイーツ文豪男子

作品本文から解説、物語に関する文章、と、教科書定番教材『こころ』の読解に**単元全体**で取り組みます。

夏目漱石
奥泉光
宮川健郎
多和田葉子

189 183 178 175 142

6

近代の創造

近代の文章に価値を見いだす

極限の表現に迫る

時代を超えた心情に迫る

作家の人間像を捉える

永訣の朝

「アンソロジー」を企画する

たけくらべ

近代の文体をたどる

正岡子規—もうひとつの顔

伏して見る花 細道の井戸

宮沢賢治
編集委員会・東雅夫
樋口一葉原作 川上未映子訳
森鷗外・二葉亭四迷ほか

197 192 200 206 210 215

7

史実と虚構

歴史の語り方について考える

史書が伝えるものを捉える

物語に投影された解釈を考える

歴史と文学の接点を捉える

項羽と劉邦—「史記」を読む

鴻門の会 (「史記」より)

花山天皇の退位—「大鏡」を読む

栄花物語—花山院の出家

歴史から物語、そして歴史物語へ

憧れの物語 独り占め

尾形勇
司馬遷／大木康訳
永井路子
編集委員会訳

226 233 238 243 246 251

表現プラザ4
誘惑する書評

交流を通して文章を整える

「たけくらべ」の書評
ちりめんの赤色に映る恋の哀切
大和ことばの柔らかさ

表現の扉をひらく4 引用は二〇〇字で

小川洋子
俵万智

256 258 260

読書案内

二回目からの読書

「これはなんだ！」

「読書嫌い」のあなたへ
好きなように読んだ。

蜂飼耳

青山七恵

菅原宏之

松田青子

本と付き合う

『徒然草』を読もう

自分探しより本探し

奥泉光

長谷川權

大木康

190 216 252

教科書後半では、近代以前および古典の文章も教材に加わっていきます。

Ⅱ部

8

想像と創造

文学の想像力を捉える

現実と非現実の境界に遊ぶ

古典文学の魅力と向き合う

想像力と創造力のつながりを捉える

月火水木金土日

川上作品をめぐるって 探究

川上弘美

262

源氏物語―北山の垣間見

寂聴源氏塾 探究

岸本佐知子・川上弘美

紫式部原作 角田光代訳

269

想像への畏敬―大和路をゆく

発展探究 おもろさうしとユーカラ

瀬戸内寂聴

リービ英雄

272

ことばの不思議

ことばの不思議 表現の扉をひらく5 ことば選びは繊細に

穂村弘

279

9

作品の変貌

言語文化の可能性を追求する

読みを他の方法で表現する

作品とメディアについて考える

文学のもつ社会的な広がりを考える

靴

夕鶴 探究

竹取物語―かぐや姫の昇天

マンガ古典文学 竹取物語 探究

作者未詳 森見登美彦訳

池田理代子

301

ピクニックの準備

発展探究

発展探究 映画「夜のピクニック」 ドラマの中の方言はどこにある

長澤雅彦・多部未華子ほか

恩田陸

304

ミユシヤ、ゴッホ、河鍋暁斎、モネの絵画作品

参考 いちまいの絵

原田マハ

311

小説『ピクニックの準備』と映画『夜のピクニック』を合わせて取り上げ、インタビューなども交えながら**作品同士の関係性**に触れていきます。

10

文学の普遍性①

時代を越えて生きる古典文学を温ねる

人間に対する考え方を深める

自然に対する見方を深める

社会に対する見方を深める

文学から世界への見方を深める

表現ブラザー6 言葉でスケッチ

五感で感じたことを言語に表現する

雨月物語―浅茅が宿

方丈記―養和の飢饉・大地震

古譚

参考 桃花源記(書き下し文)

「虫めづる姫君」の観察眼

参考 堤中納言物語 虫好きのお姫様

調査・研究型小論文を書く



設定したテーマの調査・研究を行い、小論文にまとめる

上田秋成原作 石川淳訳

338

鴨長明原作 三木卓訳

337

茨木のり子 陶潜

331

中村桂子 中島京子訳

329

中島京子訳

323

中島京子訳

314

中島京子訳

311

中島京子訳

304

中島京子訳

296

第10～第12単元では、自ら課題を設定し、主体的に文学に取り組みます。

本編教材の作者などが**読書にまつわる自身のエピソード**を紹介する「高校生のための読書案内」を、単元間に配置しています。

読書案内

開かれる世界への扉	渡辺満里奈	286
ここではないどこかへの扉	穂村弘	330
新しい言葉に出会う楽しみ	中村桂子	368
翻訳が開く世界	松永美穂	412
どうして人は読書をするのか	小野正嗣	444



資料編

1 物語・小説読み解きツール	446
2 小さな図書館によるこそ	452
3 探究のためのブックガイド	456
4 読書生活を広げるための 主な作(筆)者+作品名索引	460

二次元コードの内容一覧



第10～第12単元にわたり、「調査・研究型」「意見・主張型」「企画・提案型」の**3つの形の小論文**を書く教材を設けています。

書く
自分の企画・提案
内容を検討し、
小論文にまとめる

言葉を通して つながることに ついて考える	441
文学の未来	434
企画・提案型小論文を書く	441

12
文学の普遍性 ③

自分と未来をつなぐ
文学の魅力を探る

人間の持つ本性に ついて考える	421
人間の存在に ついて考える	422
人生の未来図に ついて考える	428
山椒魚	414
珊瑚のリング	422
旅する本	433

「旅する「翻訳」文学」では、世界各地の翻訳作品を、読書案内の形で紹介しています。

11
文学の普遍性 ②

空間を越えて生きる
翻訳文学の価値を
見つける

人間についての 考え方を深める	370
社会とのつながり について 考えを深める	380
人類に共有される 課題について 考えを深める	387
異文化との交流の 意義について 考えを深める	388
星の王子さま	370
藤野先生	380
ナガサキの郵便配達	388
卵を抱きながら。もしくは、くせになる翻訳	404
意見・主張型小論文を書く	409

この教科書が目指す国語の力 主体的・対話的で深い学びのために

I部

単元 単元の能力目標

学習活動のポイント

基本教材

探究教材・参考教材

読み解きツール

巻頭

1 文学の言葉を
感じ取る

言葉にこめられた作家の思いを読む
探究 作者自身の随筆から作品を読み直す
言葉に対する作家の洞察を読む
探究 作品の素材を通してイメージを広げる

詩 最初の質問 長田弘
詩 二十億光年の孤独 谷川俊太郎
随想 虹の雌雄 蜂飼耳

随想 意味以前の世界 谷川俊太郎
歌謡 RAIN SEKAI NO OWARI

象徴・暗示

2 解釈の多様性を
楽しむ

3 心情の表現に
読みひたる

超現実的な事象を通して描かれていることを考える
探究 書評を通して作品のあり方を考え、読み直す
表現が生み出す非現実的な世界を捉える
探究 同じ作家の作品を比べて読む
作品が読者に問いかけていることを考える
探究 テーマを関連づけて読む

小説 子感 青山七恵
小説 雛始雛 絲山秋子
小説 山月記 中島敦
小説 デューク 江國香織
小説 少年という名前のメカ 松田青子

随想 皮膚と心 藤崎彩織
小説 草之丞の話 江國香織
書評 石ならぬ中島敦 三浦しをん

人物造形
構成・展開

3 心情の表現に
読みひたる

4 作家の
ストラテジーを
読み解く

作品が描いている人間の心の複雑さを読む
探究 解説を通して作品を読み返す
作品を分析しながら読むことの意義を捉える
探究 作家の「語り」や「言語」について考える
作品が表現していることを考えながら読む
探究 作品どうしのつながりを捉える
作品に描かれた人間の心の機微を読む
探究 作品の文体の違いを捉える
作風や作家像の捉え方について考える
非歴史探究 作品から作家の人間像を想像する
歴史書というものを、どのように読むかを考える
探究 作品と解説を関連づけて読む
歴史物語をどのように解釈するかを考える
探究 作品と評論を関連づけて読む
非歴史探究 歴史に基づいた文学作品の読み方を考える

小説 バースデー・ガール 村上春樹
小説 少年という名前のメカ 松田青子

短文集 村上作品の比喩表現例 自評「バースデー・ガール」について 村上春樹

語り手
キーアイテム

4 作家の
ストラテジーを
読み解く

5 表現の意味を
捉え直す

近代の文章に
価値を見いだす

詩 永訣の朝 宮沢賢治
小説 たけくらべ 樋口一葉
小説 上未映子 沢村上未映子

短文集 近代の文体をたどる

場面設定
人物造形

4 作家の
ストラテジーを
読み解く

6 近代の文章に
価値を見いだす

歴史の語り方に
ついて考える

評説 項羽と劉邦 尾形勇
評説 花山院の退位 永井路子
評説 歴史から物語、そして歴史物語へ 秋山虔

漢文 鴻門の会(史記)より 沢木木康 沢木木康
古文「栄花物語」 花山院の出家

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

冬 高木あきこ
詩 未知へ 木村信子
夕焼け 吉野弘
亮炭翁 白居易

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

好きな本を選んで書評を書き、相互評価によって文章をより向上させる

誘惑する書評

書評 ちりめんの赤色に映る恋の哀切 大和ことばの柔らかなさ 俵万智

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

7 歴史の語り方に
ついて考える

7 歴史の語り方に
ついて考える

和歌・俳句からストーリーを想像して現代版歌物語を書き、交流する

現代に遡る歌物語

古文 大和物語 古典和歌・近世俳句

背景

各単元・教材で身につける言葉の力と教材、言語活動の一覧を提示。見直しと振り返りをもって学習活動に取り組みます。

『新』シリーズ教科書では身につける「言葉の力」ごとに単元を組んでおり、「何のために学習を行うか」が明確です。

表現ブラザ		12												11						10						9			8			単元			
6	5																															II部			
五感で感じたことを言語に表現する	素材を吟味し、すぐれた表現を追究する	自分と未来をつなぐ文学の魅力を探る												空間を越えて生きる翻訳文学の価値を見つける						時代を越えて生きる古典文学を温める						言語文化の可能性を追求する			文学の想像力を捉える			単元別能力目標			
絵画からよみとったことを言葉で描写し、相互に論評する	自作の短歌・俳句を読み合い、よりよい表現を探る	近代的文学の意義を論じる												翻訳文学や翻訳に関する評論を手がかりとして、意見・主張型小論文を作成する						古典文学における人間の描き方を捉える						現代文学の視点を比較して読む			現代文学の魅力をあらわすかを考えたが読む			学習活動のポイント			
言葉でスケッチ	表現の宝さがし	小説 旅する本 石田衣良												小説 山椒魚 井伏鱒二						詩 古譚 茨木のり子						小説 ビクニックの準備 恩田陸			小説 靴 安部公房			小説 月火水木金土日 川上弘美			基本教材
河鍋曉斎・モネ	論評 ことばの不思議 穂村弘	小説 旅する本「まえがき」												小説 山椒魚 井伏鱒二						古文 方丈記 鴨長明						小説 ビクニックの準備 恩田陸			小説 靴 安部公房			小説 月火水木金土日 川上弘美			探究教材・参考教材
		小説 旅する本「まえがき」												小説 山椒魚 井伏鱒二						古文 方丈記 鴨長明						小説 ビクニックの準備 恩田陸			小説 靴 安部公房			小説 月火水木金土日 川上弘美			読み解きツール

この教科書で学ぶために

教科書の構成

この教科書は、主に二年生で学習する「I部 1〜7」単元、三年生で学習する「II部 8〜12」単元、書く力をつける「表現プラザ1〜6」及びさまざまな場面で活用できる「資料編」で構成されている。

各教材のトップ（読むこと）

上から、単元で考えたいテーマ・身につけたい国語の力、学習活動のポイントを示した。また、作品の成立年代バーをおいた。



各教材の注の欄（読むこと）

語注（①②……）主に固有名詞や難解な語句に解説をつけた。

発問（▼印）教材理解の手がかりとなる箇所に▼印をつけ、問いを示した。

語句（*印）主に慣用的な表現や熟語を中心に取り上げた。

④ 羅針盤（読むこと）

課題 教材を的確に理解するための課題を示した。

⑤ 協働的な学びのために

対話的に学びを深めるための活動を示した。

⑥ 探究―考えを深める

比較読みや重ね読みのための探究教材をおいた。

読みナビ（10〜12単元）より深く読むための視点を課題として示した。

読み解きツール（資料編）

作品をよりの確に読んでいくためのスキル（技能や能力）を、教科書教材を例に用いて、12の視点から図解して示した。

⑦ 書くこと（表現プラザ・小論文）

主に創作活動を行う「表現プラザ」と総合的に書く力をつけるための「小論文」教材（10〜12単元）を配した。

コラム（読むこと）

単元に関連した知識や情報とミニ課題を掲載した。（1〜9単元）

表現の扉をひらく（書くこと）

各表現プラザに、書く力を向上させるためのコラムを掲載した。

単元の振り返り

各単元末に、自らの学習を振り返るためのポイントを示した。

⑧ 高校生のための読書案内

各単元末に、「読書」に関する書き下ろしのメッセージを掲載した。

⑨ リンクマーク

教科書内で参照できる「資料編」のページ等を示した。

⑩ 二次元コード

さらに学びを広げたり深めたりするときのために、適宜、二次元コードを付している。なお、二次元コードには、以下のURLからもアクセスできる。

<https://bqr.sanseido-publ.co.jp/05-sinhungaku/contents/>

3 人間の姿と心

心情の表現に読みひたる

小説ではさまざまな内実を抱えた人物が登場し、非日常的なできごとが語られる。現実世界を越えた創作の魅力を味わおう。

単元扉では、目標に向けて**複数の教材を有機的に絡めて学んでいく流れを明示**しています。

〈執着〉する心を捉える

山月記 中島敦

探究 石ならぬ中島敦 三浦しをん

思う心を捉える

デューク 江國香織

探究 草之丞の話 江國香織

コラム 虫に小鳥に蚕に虎に……変身の話

📖 高校生のための読書案内 笹原宏之

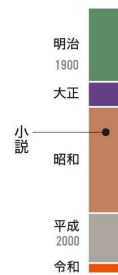
心情の表現

〈執着〉する心を捉える

山月記

中島敦

教材冒頭に、この教材を通じて取り組む学習内容を示しています。



超現実的な事象を通して描かれていることを考える
 探究 書評を通して作品のあり方を考え、読み直す



① 隴西の李徴は博學才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、④ 狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、⑦ 賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、⑧ 號略に帰臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、⑨ 文名は容易に揚がらず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴はようやく焦躁にかられてきた。この頃からその容貌も⑩ 峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、

- ① 隴西 中国甘肅省東南部の地名。
- ② 才穎 才能が抜きん出ていること。
- ③ 天宝 唐の玄宗皇帝時代の年号(七四二―七五六)。
- ④ 虎榜 官吏登用試験(科挙)合格者(進士)の姓名を掲げる板。
- ⑤ 江南尉 江南は長江下流の南の一带。ここでは浙江省辺りをいう。「尉」



妻子の衣食のために⑪ 節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、⑫ 往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として⑬ 樂しまず、⑭ 狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に

出、⑮ 汝水のほとりに宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がると、何かわけのわからぬことを叫びつつそのまま下に飛び下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻って来なかった。付近の山野を搜索しても、なんの手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

- ⑥ は昔中国で地方の軍事や警察などを扱った官。
 - ⑦ 狷介 固く自分の意志を守り妥協しないこと。
 - ⑧ 賤吏 身分の低い官吏。
 - ⑨ 故山 生まれ故郷の地。
 - ⑩ 號略 河南省西部の靈宝市の地。
 - ⑪ 帰臥 官を辞して故郷に帰り、静かに暮らすこと。
 - ⑫ 峭刻 厳しく、険しい様子。
 - ⑬ 登第 科挙に合格すること。
 - ⑭ 儁才 才能の優れた人。
 - ⑮ 快々 不満が募ること。
 - ⑯ 狂悖 非常識で道義に背くこと。
 - ⑰ 汝水 河南省より発し、淮河に注ぐ川。
- * 語句 焦躁にかられる／節を屈する／齒牙にもかけない

教材本文は、シンプルで読みやすいレイアウトになっています。

今日ハ爪牙誰カ敢ヘテ敵センヤ
 当時は声跡共に相高かりき
 我ハ為異物ト蓬茅の下ニあれども
 君ハ已乗 輶 氣勢豪
 此夕溪山対明月
 不成 長嘯 但成 嘯

今日は爪牙誰か敢へて敵せんや
 当時は声跡共に相高かりき
 私は異物と為りて蓬茅の下にあれども
 君は已に輶に乗りて氣勢豪なり
 此の夕べ溪山明月に対し
 長嘯を成さずして但だ嘯を成すのみ

声跡 世間の名声。
 蓬茅 ヨモギとチガヤ。
 雑草の意。
 輶 一二頭の馬に引かせ
 る物見車。当時、官吏の
 乗用とした。
 長嘯 声を長く伸ばして
 詩歌を吟ずること。
 嘯 獣が短くほえ叫ぶこ
 と。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々はおもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったかわからぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であった時、おれは努めて人との交わりを避けた。人々はおれを倨傲だ、尊大だといった。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才といわれた自分に、

③② 倨傲 おごりたかぶること。
 ③③ 郷党 村里。ここでは、生まれ故郷の村。

自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。おれは詩によって名を成そうと思いつつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心のせいである。己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかつた。おれはしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせ、結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これがおれを損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、おれの外形をかくなごくと、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、全くおれは、おれのもっていた僅かばかりの才能を空費してしまつたわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長い、何事かをなすにはあまりに短いなど口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とおれのすべてだったのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、

③④ 碌々 平凡なこと。
 ③⑤ 憤悶 憤りもだえること。
 ③⑥ 慙恚 恥じて憤ること。
 ▼問 「人間は誰でも……性情だという」とはどういうことか。

* 語句
 羞恥心／鬼才／切磋琢磨／俗物／弄する

適宜、発問を置き、スムーズな読解につなげます。

また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に登ったら、こっちを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お日にかけてよう。勇に誇ろうとしてはない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちをきみに起こさせないためであると。

袁修は叢に向かって、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え得ざるがとき悲泣の音が漏れた。袁修も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。

一行が丘の上に着いた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

④ 咆哮 獣がほえたけるところ。



中島敦 なかじまあつし
一九〇九(明治四二)〜一九四二(昭和一七)年。小説家。東京都の生まれ。中国古典文学に親しむとともに、西洋の文学・哲学の影響も受けて、独自の作品世界を形作った。作品に「李陵」「名人伝」などがある。本文は『中島敦全集 1』(一九九三)によった。



羅針盤

各教材後の手引き「羅針盤」では、内容理解の問いから協働学習の課題、探究的な課題まで、一通りの学習活動を提示しています。

協働的な学びのために

一読後に疑問に思ったこと、理解しづらかったことをメモし、そのことについてグループで交流しよう。

課題1 「虎」になる前の李徴はどのような人物として描かれているか。読み取ったことを、まとめてみよう。

課題2 袁修はどのような人物として描かれているか。また、李徴にとって袁修はどういう存在か。簡潔にまとめよう。

課題3 李徴は自分が虎になってしまった理由をどのように捉えているか。次の表現に留意し、考えよう。

- 理由もわからずに……生き物のさだめだ。(72・10)
- ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。(77・3)

課題4

最後に李徴が叢を出て、自らの姿を袁修の目にさらしたのはなぜだろうか、考えてまとめよう。

③ 事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、……おれのすべてだったのだ。(77・13)

④ 飢え凍えようとする妻子のことよりも、……こんな獣に身を墮とすのだ。(79・11)

読み解きツール⑩ 感情表現 450ページ

探究 考えを深める

次の書評「石ならぬ中島敦」をあわせて読んで、「書評」の役割について考え、意見交換をしよう。また、他の作品の書評を読み、気がついたことを紹介し合おう。



各教材について、さらに学びを深めるための多様な関連テキストを「探究教材」として掲載しています。

探究教材 石ならぬ中島敦 三浦しをん

中島敦の作品と出会ったのは、教科書に載っていた『山月記』がきっかけだ。出だしから難しい漢字と見慣れぬ熟語の連続で、決してとつときのいい話とは思えぬが、仲間内では好評の一作だった。

「なんでこれ、教科書に載ってんだろ。」

というのが、私たちの疑問であった。

教科書が推奨する「読み筋」としては、「自尊心と孤独について。また、それゆえの挫折と悲哀について。」といったところだった覚えがあるが、当然、私たちはそうは読まなかった。年若く、経験も乏しかったから、自尊心がもたらす功罪も、本格的な挫折や悲哀も、ひとつにつきまとう孤独も、あまりピンとこなかったのかもしれない。いま『山月記』を読めば、教科書の提示した「読み筋」に沿った形で、「なるほど、そういう話でもあるな。」と理性ではわかる。

理性では、というのが曲者で、『山月記』に対する本質

的な感想は、実は初読のときから変わっていない。この作品への仲間内での評価は、一言で言うると、

「変な話！」

だった。

まず、虎になるのが変だ。叢に隠れた虎がしゃべるのを聞いて、即座に旧友の声だと思いがたるのも変だ。しかしそれを言うなら、虎が漢詩を詠むのも、虎に妻子の面倒を頼まれて二つ返事で引き受けるのも、とにかくもう、なにからななまで変だ。

私は学校図書館で全集を広げて拾い読みした。どの話も、ブツ飛んでいておもしろかった。中国はもとより、波斯、アッシリヤ、パラオ。舞台設定は縦横無尽で、とてもリアルだ。でもどこか、夢の世界のような手触りもある(ものすごく微細だったり広大だったりする部分に、突如として明確すぎるほどに焦点が合うあたりなど)。そしてすべての作品において、登場人物(妖怪なども含む)が嘆いたり憤ったりしながら、いきいきと脈動していた。

いったい中島敦とは、どんなひとなんだらう。小説を読

めば読むほど、実体がつかめなくなる気がした。なにかが迸っていることは感受される。「才能」という根拠も定義も曖昧なものではなく、「気迫」とでも言えるような、魂の底から激しく深く迸るなにかが。だが、彼がなにを喜びとし、なにを哀しみとして生活していたのか、個人的な体臭のようなものは、小説からは周到にかき消されていると感じた。

だが、ばらばらと短歌を眺めていた私は、ある一首を読んで怖くなった。

我はもや石とならむず石となりて冷たき海を沈み行かばや

「喘息に苦しめられる夜々」に詠んだ歌だ、と文庫の解題にある。固く小さな石になって、冷たい海に沈んでいきたい。そう願うほどの苦しみと孤独とは、いったいどんなものだろう。こういう歌を詠み、小石ではなく金剛石の輝きと強さを宿す小説を書いて、若くして死んでいった中島敦は、はたして幸せだったのだろうか。もし、彼がぬくも

りを知らず、それこそ李徴のように狷介なまま、絶望のうちに生を終えたのだとしたら、「生きる」ことも「小説を書く」ことも、ひとに残酷しかもたらさない行為だと思った。いまになってみると、まったく傲慢な考えだ。中島敦が幸せだったか否かを云々できるほど、私自身、真に幸せを知っているわけではないのだから。まことに「お幸せ」な考えを抱いたものである。

しかしとにかく、高校生の私は、「中島敦には不幸であつてほしくない。」と考え、彼の生涯が不幸であつたという証左にぶつかりたくない一心で、全集に収められた小説以外(書簡やエッセイ的なもの)は読まずにおくことにした。

短編をたまに読み返すぐらいで十年弱が過ぎたころ、『中島敦 父から子への南洋だより』(川村湊・編)が刊行された。購入し、いききっかけだと思つて、おそろおそろ読んでみた。

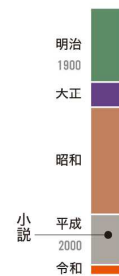
中島敦は、一九四一年(昭和十六年)から翌年にかけて、九カ月ほど南洋群島へ単身赴任している。当時、日本の植

心情の表現

思つ心を捉える

表現が生み出す非現実的な世界を捉える
 探究 同じ作家の作品を比べて読む

デューク

江國香織えくに かお

歩きながら、私は涙がとまらなかつた。二十一にもなつた女が、びよびよお泣きながら歩いているのだから、他の人たちがいぶかしげに私を見たのも、無理のないことだった。それでも、私は泣きやむことができなかった。

デュークが死んだ。

私のデュークが死んでしまった。

私は悲しみでいっぱいだった。

デュークは、グレーの目をしたクリーム色のムク毛の犬で、プリー種という牧羊犬だった。わが家にやってきた時には、まだ生まれたばかりの赤んぼうで、廊下を走ると

手足がすべってべたんとひらき、すーっとお腹なかですべって

しまった。それがかわいくて、名前を呼んでは何度も廊下を走らせた。(そのかっこうがモップに似ていると言って

みんなで笑った。) たまご料理と、アイスクリームと、梨な

が大好物だった。五月生まれのせいかわ、デュークは初夏が

よく似合った。新緑のころに散歩につれていくと、匂やかな風に、毛をそよがせて目をほそめる。すぐにすねるたち

で、すねた横顔はジエームス・ディーンに似ていた。音楽

が好きで、私がピアノをひくと、いつもうすぐままって聴いていた。そうして、デュークはとても、キスがうまかつた。

各单元とも、目標とする「言葉の力」に基づく複数の教材が配置されています。

死因は老衰で、私がアルバイトから帰ると、まだかすかにあたたかかつた。ひぎに頭をのせてなでているうちに、いつのまにか固くなって、つめたくなつてしまった。デュークが死んだ。

次の日も、私はアルバイトに行かなければならなかつた。

玄関で、みょうに明るい声で、「行ってきます」を言い、表にでてドアをしめたとたんに涙があふれたのだつた。泣けて、泣きながら駅まで歩き、泣きながら改札口で

定期を見せて、泣きながらホームに立って、泣きながら電車に乗った。電車はいつものとおり混んでいて、かばんを

かかえた女学生や、似たようなコートを着たおつとめ人たちが、ひっきりなしにしゃくりあげている私を遠慮会釈なくじろじろ見つめた。

「ごめん。」

無愛想にぼそつと言って、男の子が席をゆずってくれた。十九歳くらいだろうか、白いポロシャツに紺のセーターを着た、ハンサムな少年だった。

「ありがとう。」

蚊のなくような涙声でようやく一言お礼を言って、私は座席にこしかけた。少年は私の前に立ち、私の泣き顔をじつと見ている。深い目の色だった。私は少年の視線にすくめられて、なんだか動けないような気がした。そして、いつのまにか泣きやんでいた。

私のおりた駅で少年もおり、私の乗りかえた電車に少年も乗り、終点の渋谷までずっといっしょだった。どうしたの、とも、だいじょうぶ、とも聞かなかつたけれど、少年はずつと私のそばにいて、満員電車の雑踏から、さりげな



作品の成立時代が一目瞭然の「成立年代バー」で、時代背景を踏まえた読解を行えます。

教材ごとに手引き「羅針盤」を設定しており、一つひとつの教材に、丁寧に取り組んでいくことができます。



羅針盤

課題1

次の①～⑤は、それぞれどのような様子を表現しているか、他の言葉で説明してみよう。

- ① びよおびよお泣きながら (86上・2)
- ② 匂やかな風に、毛をそよがせて目をほそめる (86下・6)
- ③ 無愛想にぼそつと言って (87上・15)
- ④ 蚊のなくような涙声で (87下・1)
- ⑤ 晴れたま昼の、冬の匂いがした (89下・2)

協働的な学びのために

「今までずっと、僕は楽しかったよ。」(90下・14)、「今までずっと、だよ。」(90下・18)の「ずっと」、「僕もとても愛していたよ。」(91上・7)の「も」はこの小説にどんな効果をもたらしているだろうか。話し合ってみよう。

探究—考えを深める

次の小説「草之丞の話」の冒頭部分を読み、物語がこのあとうどう展開していくかを想像し、他者と交流しよう。

探究教材 ▽ 草之丞の話 江國香織

世間知らずで泣き虫で、夜中に一人でトイレにも行かれ



江國香織 えくに かおり
一九六四(昭和三九)年。小説家。東京都の生まれ。二〇〇四年に「号泣する準備はできていた」で直木賞を受賞。軽やかな文体とこまやかな人物描写で、日常を鮮やかに表現する。作品に「きらきらひかる」などがある。本文は『つめたいよるに』(一九九六)によった。



ないおふくろが、いったいどうして女手一つで、これまで僕を育ててこられたのか、ふしぎには思っていた。それでも、女優というのはよほどもうかる商売なのだろうと、僕はこのんきに考えていた。

五月。僕は中学にも慣れ、さっそく午後の授業をさぼって映画をみに行った。すると電車の中に、桜色の着物を着たおふくろがいた。

(どこに行くんだろ?)

そうは思っても、こちらも学校をぬけだしてきた身、うかつに声もかけられず、遠くからながめていた。おふくろは、小さなふろしき包みをひざの上にかかえていた。

電車をおりたおふくろは、駅前商店街をばくばくと足ばやに歩き、八百屋の前で立ちどまった。そして、おもむろにふろしき包みをほぐくと、中からあじの干物(らしきもの)をとりだして地面におき、まるで墓参りでもするよう(らしき)に、しんみように手をあわせるのだった。あつげにとられている僕のそばをすりぬけて、おふくろはさっさと駅へひきかえしてしまった。

七月。朝寝坊をした日曜日、バジャマのまま台所に行くとおふくろは庭にでていた。よく晴れた、しずかな午後だった。びわの木の下に立って、おふくろはさむらいのかっこうをした男と話をしている。紺の着物に刀をきちんとぶらさげて、ちよんまげもりらしいさむらいだった。おおかた、ふうがわりな役者仲間だろうとは思ったが、それにしてはさむらい姿が板につきすぎている。これが草之丞だった。

おふくろは日傘をくるくるまわして、まるで女学生のよう(らしき)に頬をそめている。サンダルをつっかけて、僕も庭にでた。

「おはよう、母さん。お客様なの」

おふくろはびくっとして、しばらく僕の顔をみつめていたが、やがてにっこりと微笑んだ。

「草之丞さんといってね、お父様ですよ、あなたの」

僕は、僕の心臓がこんなにじょうぶでよかったと思う。おふくろの話はこうだった。草之丞は真正正銘のさむらいで、また真正正銘の幽霊で、おふくろに一目惚れをした。おふくろがまだ新米女優だったころ、舞台上で時代劇の端役

教材と教材の間にある**コラム**では、単元内の教材に関連する周辺・背景情報を紹介しています。

コラム

虫に小鳥に蚕に
虎に……変身の話

「ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変わっているのを発見した。」という書き出しで始まる、二十世紀初めのプラハ出身の作家、フランツ・カフカの「変身」は、人が虫に姿を変える話として有名である。

古代中国には、そのような話が少なくない。海に溺れた少女が精衛せいゑいという小鳥になったという話(『山海経』)、仕事でいない父に会いたい娘が飼馬に父を連れてきたら嫁になると約束したが、馬が父を連れ帰ると馬との約束を破り、そのために蚕かいになってしまおうという話(『搜神記』)などがある。

このような不思議な話は史実を伝えようとして書かれた歴史書には残せないため、「志怪(怪を志す)」や「伝奇(奇を伝う)」という書物として伝えられた。

「人虎伝」は唐代の張鷟による伝奇小説集「宣室志」にある。役人の李徴が周囲への不満から精神に異常をきたし

15

10

5



精衛(山海経)

精衛は、木や石を運んできて、自分が溺れた海を埋めようとしたが、ついに果たせなかった。ここから、実現できないことを企てて徒勞に終わるという意味の「精衛海をうずむ」という故事ができた。

オシラサマ

日本でも、馬との約束を破って昇天した娘の伝承から、馬や娘をかたどった人形「オシラサマ」信仰がみられる。「搜神記」の影響を受けた可能性が指摘されている。



虎になるといふ話である。蚕も虎もどのように変身したかは記されていないが、どちらも馬を騙したことや、罪を犯したことの報いのように語られている。
中島敦は「人虎伝」に、人間の強烈な個性が、外面と内面の精神とを同調させることで変身をもたらすという近代的な解釈を加え、自我と葛藤する人間の姿を描き出した。

▼紀元前四世紀頃の思想家であった荘子の「胡蝶の夢」などを読んでみよう。

5

をやった。セリフはたった一言だったけれど、あの世で見物していた草之丞は、そのたった一言のセリフ、「おいたわしゅうございませう」にすっかりまいってしまい、やもたでもたまらず、下界にやってきたのだ。二人はめでたく恋におち、僕が生まれたというわけだった。

「それからの十三年間、草之丞さんはいつだって私をたすけて下さったのよ」

「たすけるって、どうやって」

「いろんな相談にのってくたさるし、眠れない夜には子守唄もうたってくたさるし、お金にこまったら、お金も貸してくたさるわ」

「幽霊が、金を」

「ええ。たいせつな刀やお皿を売ってね」

「……」

「だから私も、五月には供養をかかさないと」

おふくろの説明によれば、元和八年五月七日、草之丞が壮絶なる一騎打ちの末にあの世へいった野つ原が、現在のあの、八百屋だったらしい。つまりおふくろはあの日、五

15

10

5

月七日の命日に、草之丞の好物をかかえて、いそいそと墓参りに行ったのである。僕は絶句してしまった。

草之丞は、ちかくで見ると思いのほか大きく、なかなかの二枚目だった。肩をいからせて、うつむいている。ひどく緊張しているようだった。もちろん僕も緊張していた。

「二人とも黙っちゃって、どうしたの」

ふしぎそうに言ったおふくろをみて、どこまで天真爛漫な人だろう、と僕は思った。

「はじめまして」

しかたなく、僕の方から口をきった。

「こんにちは」

ひくい声だった。

「そなたにとっては、はじめましてなのだね。私はいつも、そなたを見ていたのだが」

へんな感じだった。いつも見ていた、なんて気が悪い。僕はぶっくらぼうにおじぎをして、さっさと部屋にひきあげた。僕は、幽霊の息子だったのだ。(後略・続く)

(出典 『つめたいよるに』 一九九六年)

10

5

単元末には、単元を通した振り返りと、作家などによる読書エピソード紹介が設けられています。

単元の学習を振り返ろう

- 人間の心情と超現実的なできごととの関わりや描かれ方を考えながら作品を読むことができたか。
- 表現が生み出す非現実的な世界観を考えながら読むことができたか。
- ここで学んだことをどのようになかしていけると思うか。

● 笹原宏之 一九六五(昭和四〇)年。国語学者、言語学者。東京都の生まれ。著者に『漢字の歴史』『謎の漢字』などがある。

文学の想像力

古典文学の魅力と向き合う

源氏物語

紫式部 原作
北山の垣間見
角田光代 訳

紫式部 原作
角田光代 訳



後半の単元では、古典文学も取り上げています。

十八歳の春、光源氏は熱病にかかり、治療のため、北山にすむ聖(修行僧)のもとを訪ねて加持祈禱を受けた。その合間にあたりを散策するうち、小柴垣を巡らし、庭の木立も風情のある僧坊に童女や女房たちがすんでいるのに興味をもった。ある日の夕刻のことである。

春の日は長く、なかなか暮れず、することもなく退屈な光君は、夕暮れのたいそう霞んでいるのに紛れて、さっきの小柴垣のあたりに出かけてみた。惟光のほかはお供の者たちは帰してしまっ、惟光とともに垣の内をのぞいてみ

ると、すぐその西に面した部屋に持仏を据えてお勤めをしている尼がいた。簾を少し巻き上げて花を供えているようである。中の柱に身を寄せて座り、脇息を机がわりにして経巻を置き、大儀そうに読経をしている尼は、ふつうの身分の人とも思えない。四十過ぎくらいで、色が白く氣品があり、ほっそりしているけれども、頬はふくよかで、目元のあたり、うつくしく切り揃えられた髪も、長い髪よりかえって洒落た感じだと光君は感心して眺めた。こぎれいな二人の女房と、女の子が、出たり入ったりして遊んでいる。その中にひとり、十歳くらいだろうか、白い下着に

古典文学が長く人々を魅了してきたわけを考えると、すぐその西に面した部屋に持仏を据えてお勤めをしている尼がいた。簾を少し巻き上げて花を供えているようである。中の柱に身を寄せて座り、脇息を机がわりにして経巻を置き、大儀そうに読経をしている尼は、ふつうの身分の人とも思えない。四十過ぎくらいで、色が白く氣品があり、ほっそりしているけれども、頬はふくよかで、目元のあたり、うつくしく切り揃えられた髪も、長い髪よりかえって洒落た感じだと光君は感心して眺めた。こぎれいな二人の女房と、女の子が、出たり入ったりして遊んでいる。その中にひとり、十歳くらいだろうか、白い下着に

現代語訳による内容理解を中心に、原文も交えつつ古典の魅力を味わいます。

高校生のための読書案内



「読書嫌い」のあなたへ

笹原宏之



皆さんの中に、作者の意図を読み取ることが苦手という人がいませんか。でもそれは活字に向いていないということではなく、作品の表現のほうに関心があるのかもしれない。

作品は私たち皆のもので、楽しみ方やアプローチの仕方はさまざまであっていいのです。坪内逍遙は「うるさい」を「五月蠅い」と書いていますが、ピンとこないなと思つたらチャンスで、そこから感覚や暮らした、気候の変化まで考えられそうです。

外来語はカタカナという常識は、すでに夏目漱石がロマンを「浪漫」、秋原朔太郎がドアを「フックル」を「叩つく(フックル)」と書いていて、覆されます。梶井基次郎で「檸檬」を覚えた人もいます。しかし梶井は実は檸檬と書こうしれません。

として原稿に「檸檬」を木偏にした誤字を書いてしまうなど、いつも間違えていました。でも檸檬を想わせる果物だからこそ爆発を予感したのかな、なんて考えてみるのも面白いでしょう。

不幸治は「文化」と書いて「はにかみ」とルビを振ることを讀めました。このように熟語を独自に読ませる表現方法さえあり、今のライトノベルや漫画より盛んだったともいえます。もつと身近な表記も目に止まります。コービーが当て字で「珈琲」と書かれている。「出会い」ではなく「出逢い」となっている。そんな活字に込めた作者の想いや狙いを自身の知性と感性を用いて読み取ってあげれば、作品がもつと楽しく身近に感じられるかもしれない。

小説から映画化された『夜のピクニック』について、監督や出演者へのインタビューも交えつつ、**作品の関係性**について学びます。

インタビュー
ながさわまさひこ
長澤雅彦 監督

——キャストに関して結果、原作のファンからも評価されていたかと思いますが、演技指導などはされましたか？
もともと、「演技してもらおう」と思っていなかったのですが、特になにも指導していませんね。

この作品に対して、役に対して、自分がどう思っているのか、その登場人物をちゃんと感じていれば、自分が何をすればいいか分かってくると思います。そういう力のあがるキャストを選んだのですから。

——でも彼らは不安だったのでは？
キャストから「監督から何も言ってもらえなかった」とか言われたんだけど、言ったらやれるのかなあ(笑)。

石田くんに対しては、取って突きましたね。それで彼も悩んだというか、その迷い加減が、今回の不安定な「融」という存在にうまくはまりましたね。そういう演出ですよね(笑)。演技に対する答えは見えている人によっても違うし、監督が出した答えが正しいわ

映画
夜のピクニック



[映画] 夜のピクニック 台本
恩田陸 (原作者) インタビュー
長澤雅彦 (監督) インタビュー
多部未華子 (主演女優) インタビュー
池上冬樹 (文芸評論家) のコメント

けではない。自分で見つけていくものなんです。必ず正解がある問題の答えを読み取って、その正解を出さないと丸がもらえないってことに慣れきっていると、自分で答えを探し出して、それを正解にしていって、自分で答えがなくなってくるんですよ。「自分で正解にしていっていいのがこの世界だから。そういうことが必要なんじゃないかなって彼に対しては思いましたね。」

——『夜のピクニック』、一言でいうとどんな映画ですか？
青春映画って言うてしまおうとあっさりしてしまっただけで、「時間」に関する映画だと思っっています。忍のセリフにも込めたのですが、「時間」ってその瞬間、瞬間に失われていってしまうんです。その貴重さとか大事さを伝えたくった。何か大きな出来事があったも、まったく何もなくても過ぎていく時間は同じ。神様が平等に24時間与えてくれている。年取ってくると時間の大切さに気づくけど、若いときはその有り難味が分からない。いつまでも同じ時間が続いていくものだって思ってしまう。でも、そうじゃない。意識するだけで時間はまったく違ってくる。

「書く」教材を取り立てた全6回の「表現プラザ」では、手順を丁寧に示しつつ、リレー小説や詩歌の創作などの活動を提示しています。

書き方のポイント

- 1 自分が感じる作品の魅力はどこにあるのかを突きつめよう
 - ① あらすじを紹介するだけでなく、他の人に興味・関心をもってもらえる工夫をする。
 - ② 感想を述べただけでは、人の気持ちを動かすことはむずかしい。
 - ③ 自分が感じている、その作品のよさがどこにあるのかを明らかにしたい。
- 2 「なぜ」を重視しよう
 - ① 単に「おもしろかった、すばらしかった」だけでなく、思いの伝わる言葉を用いる。
 - ② 「自分がそこに魅力を感じているのは、なぜか」を掘り下げる。
- 3 常に読み手が誰かを意識しよう
 - ① 書評の読み手が、不特定多数の人々なのか、自分と同じ高校生なのか、またはそれ以外の人なのかを具体的にイメージする。
- 4 自分自身の体験や行動に結びつけよう
 - ① 作品を読んでいて思い起こした過去の体験や、作品を読んで行動したことなど、「自分にとってのこの作品の意味」を考える。
- 5 「伝える内容は自己中心的に、伝える言葉は共有的に」を心がけよう
 - ① 客観性が重視される研究レポートではないので、「何を述べるか」は個性的・自己中心的でかまわない。
 - ② 「どのような言葉や表現で伝えるか」は、読み手の気持ちに自然に落ちていくような、わかりやすく共感を得られるような表現となることをめざしたい。
- 6 書きすぎないようにしよう
 - ① 書評の読み手に、実際に作品を読んでみようという気持ちを起こさせるためには、どこか書き残したような部分があるとよい。

誘惑する書評

表現プラザ

4

交流を通して文章を整える

学びのウォーミング・アップ

私はこれが好き!

- 好きな食べ物ごとにグループを作り、なぜそれが好きか、どんなところが好きかを話し合って発表する。
- ① 好きな食べ物を次の中から選んで、グループを作る。
カレーライス ハンバーグ カツ丼
ラーメン スパゲッティミートソース
バナナ いちご ショートケーキ
ポテトチップス
 - ② グループの中で、なぜそれが好きか、どんなところが好きかを話し合い、その食べ物の魅力として自慢できるところをまとめる。
 - ③ プレゼンテーションとしての工夫を考え、各グループ2分で、クラス全体に向けて発表し合う。



巻末付録では、「物語・小説読み解きツール」や「探究のためのブックガイド」など、随時参照できる情報を掲載しています。

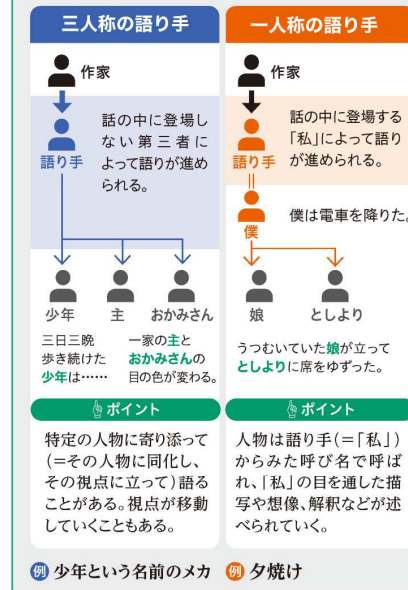
物語・小説 読み解きツール

物語や小説の中には、作家たちのいわば「技」といえるものが散りばめられている。その技を解きほぐすための鍵が、読み解きツールだ。

- 1 語り手
- 2 構成・展開
- 3 場面設定
- 4 転換点
- 5 伏線
- 6 キーアイテム
- 7 人物造形
- 8 役割語
- 9 人物相関図
- 10 感情表現
- 11 象徴・暗示
- 12 背景

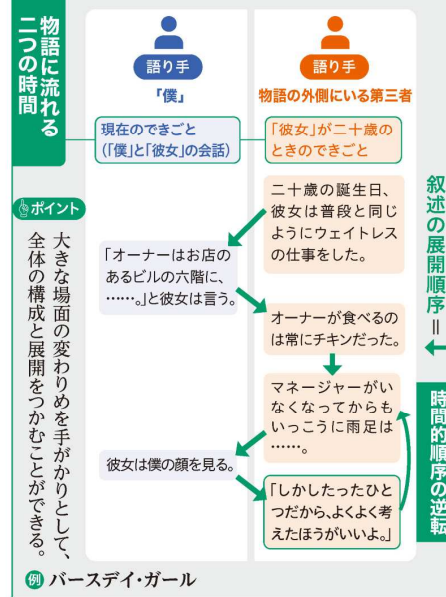
1 語り手

物語・小説は語り手によって語られていく。語り手には、一般的に、一人称の語り手(話の中の登場人物の一人)と、三人称の語り手(話の外側にいる第三者)とがある。



2 構成・展開

物語・小説の叙述の進行は、時間の流れ、できごとの順序にそのものばかりではない。作品にはさまざまなしかけが用意されている。



探究のためのブックガイド

10 単元

『新釈雨月物語』 石川淳訳
日本・中国の古典をもとに、欲望と執念が渦巻く愛情と怨念が交錯する怪異短編小説九編を、奔放な想像力と流麗な文体で現代語に訳した。

『ものけの日本史』 小山聡子
古代より病死をもたらす存在として、近世では幽霊や妖怪の派生として、時に恐れられ時に親しまれてきた「ものけ」の系譜をたどりながら、日本人の死生観・霊魂観に迫る。

『曾根崎心中』 角田光代
江戸時代に大坂で実際に起きた醤油屋の徳兵衛と、遊女・初的心中事件をもとにした人形浄瑠璃の小説化。運命の恋に出会う女の高揚、苦悩を細やかな心理描写で描く。

『私の方丈記』 三木卓
日本三大随筆の一つを現代語訳した作品。引揚者として激動の戦中戦後を生きた著者が、人間の幸福と老いの境地を描く。

『方丈記』 鴨長明 浅見和彦校訂・訳
『方丈記』研究第一人者による新校訂原文とわかりやすい現代語訳、理解を深める解説によって構成している。混迷する時代に生きる現代人ゆえに共鳴できる作品として紹介。

『ベスト』 カミユ
医師のリウは鼠の死体を発見する。ベストの発生である。孤立状態のなかで「不条理」と直面した時に示される人間の諸相や、ナチス闘争での体験を寓意的に描きこんだ長編。

『茨木のり子集』 茨木のり子
中国の詩人陶淵明の伝奇小説をもとに詩の形で現代語訳した「古譚」他を収録。現代社会への疑問を投げかける作品集。

『中国奇想小説集』 古今異界万華鏡 井波律子
この展開は、いったい何!? 『捜神記』『唐代伝奇』……六朝時代から清代まで、中国に綿々と受け継がれた変幻自在な奇想・幻想小説26編を精選。熟練の新訳でよみがえる。

『時が滲む朝』 楊逸
中国の民主化に傾倒する若者を中心として、激動の時代とその後を描き、日本語を母語としない作家として初めて芥川賞を受賞。日本と中国を舞台に、人の生きざまを問う。

『ふつろのおんなの子』のちから 中村桂子
生きものとは本が大好きな生命科学者が、児童文学のヒロインたちの生き方をとおして見えてくる世界とその可能性について語るエッセイ集。

『虫めづる姫君堤』 中納言物語 蜂飼耳訳
古典文学に潜む普遍性——恋、ユーモア、悩み、人々の感情の行方——。無類のおもしろさや意外性に富む11編が、みずみずしい訳文で蘇る。訳者のエッセイも各編に収録。

『文学のなかの科学』 千葉俊二
小説のなかに働く力学と、20世紀後半に確立した複雑系の科学。芥川龍之介、谷崎潤一郎、村上春樹といった作家たちの文学と科学をつなぐ、物語生成の法則を考察する。

○テーマ別に、チャレンジングな三冊を紹介しています。
○大学や社会生活へ向けた生涯学習の視点も取り入れています。

